

■言語理解と言語表現

言語学習には、理解(comprehension)と表現(production)の二つの側面がある。これを 4 技能の点から見ると、言語理解の中には listening と reading が含まれ、言語表現の中には speaking と writing が含まれる。そして、学習の順序としては、言語理解が必ず言語表現に先行する。つまり言語学習は、まず言語を理解することから始まり、次いで言語で表現する段階に移行する。この過程を見てみよう。

言語学習の過程で、学習者が単語・表現などの新しい言語事実に遭遇すると、最初は全く理解できないか、あまりよく理解できないのが普通である。しかし、何度か同じ言語事実を経験するうちに理解の度合いは次第に深まっていく。このような経験を繰り返していくと、学習者によって習得期間の長さは違っても、一定期間の学習の後には、その言語事実に対する理解は成熟していく。そして、やがて言語理解は、単に理解するという受身の状態にとどまらず、表現するという積極的な性質が強化される。これが言語表現への転化である。このように、言語表現は言語理解の最も成熟した部分であると考えることができる。

言語理解と言語表現の関係を図示すると、右のようになる。全体のピラミッドは言語理解を示し、上部の小さな部分は言語表現を示す。ピラミッドの底辺は、学習初期のまだ成熟していない言語理解を示し、上に行くに従って、言語理解が確実になり、成熟していくことを示している。ピラミッドの頂点は最も成熟した言語理解であり、同時に言語表現でもある。この図からも分かるように、言語表現は言語理解の一部であるに過ぎない。これらのことから言語学習上、重要な事実が引き出される。



■speaking 学習に多い誤り

話しことばを、言語理解と言語表現との関係で説明すると、聞いて理解できないものは話せないということになる。しかし、この当然の原則に反したことを行っている場合が結構多い。

speaking 学習の手順としては、学習者はまず、ある表現を聞き、教師に倣って自分でも言ってみて、最後に解説を受けるという方法をとる。しかし、これは listening、または発音の練習であっても、speaking の練習と言うことはできない。なぜなら、この場合は listening 自体がまだ学習初期の段階にあり、十分に成熟しておらず、したがって speaking に転化する可能性はないからである。それにもかかわらず、この種の練習を speaking の訓練とみなすということは、「聞いて理解できないものを話させよう」としているにほかならない。listening を speaking に転化させるためには、もっと多量の listening 学習の裏付け

が必要である。speaking の訓練と称しているものの多くは、このように実際には listening の訓練なのである。

■writing 学習に多い誤り

上に述べたことは、書きことばにも当てはまる。たとえば、中学・高校における英作文を考えてみると、これは writing の訓練ではなく、これまでに学習した文法・表現の訓練、つまり言語理解をより深めるための訓練である。しかし、そのことに気付かず、言語表現の訓練と信じている場合が多い。

たとえば、和英辞典を頻繁に引くのは、まだ言語理解が十分成熟していないことを示している。極端な場合には、和英辞典を引いて初めて知った表現を使うことがある。これは言語理解の段階を経ずして、一足とびに言語表現を行うということであり、日本語では絶対にあり得ないケースである。妙に聞えるかもしれないが、英語学習者が和英辞典を利用するためには、そこに書かれている表現をすでによく理解していなければならない。言語理解が十分成熟していない場合には、書いた英語は間違いが多くなる。英語を書くためには、まず十分英語を読んで、理解を万全なものにしておかなければならないのである。

©1993 Yukio Saegusa